

～東山梨研究の経過と概要～

## 1 研究主題

「確かな学び 広がる音楽」

～知覚・感受をもとにした音楽的思考力・判断力・表現力の育成～

### 【研究の視点】

- ① 知識・技能を活用し、一人ひとりに主体的な学びを促す活動の工夫
- ② 一人ひとりが明確な思いや意図をもち、伝え合う中で学びが広がる活動の工夫
- ③ 仲間と協働する喜びを感じながら音楽を表現したり味わったりする活動の工夫

## 2 研究の具体的内容と方法

### (1) 研究の具体的内容

#### ①小中9年間の連携を図るための実践発表の交流

- ・楽しみながら力の付く常時活動の交流
- ・子どもの意欲を喚起する授業の導入のあり方
- ・魅力ある教具や教材，楽曲の研究
- ・学習のめあてと授業の組み立てについて
- ・小中の学習内容の交流 など

#### ②授業研究

- ・年間2本の授業研究を行う。
- ・子どもの実態をとらえ，それに応じた題材の構成と学習のめあてを設定すること。
- ・児童・生徒が生き生きと主体的に学習に向かえるような授業構想と学習の手立てを講じること。
- ・子どもたち一人ひとりが楽曲に対する思いや意図をもち，音楽的な感性を存分に働かせながら学習に向かう姿をめざすこと。

### (2) 研究の方法

- ・教育研究日10回（うち授業研究会2回）
- ・講師による学習会・講習会の充実
- ・お互いの実践を交流する。

### (3) 報告書作成参加者，共同研究者

共同研究者	高野 栄子（日川小教頭）		
山梨支会	平井 祥子（加納岩小） 今井 郁子（岩手小） 萩原 久子（笛川中）	志村美貴緒（山梨小） 筒井美佐子（山梨南中）	武井 浩（八幡小） 山本 順美（山梨北中）
甲州支会	鈴木 千秋（塩山南小） 鈴木奈津美（大和小） 雨宮 雄貴（塩山北中）	金子佐由美（松里小） 竹川 美和（塩山中） 平山 昌実（松里中）	小林由紀子（井尻小） 古屋 雄人（塩山中） 武藤真由美（勝沼中）

#### (4) 具体的経過

	研究日	内 容
第1回	5月9日	・ 役員の決定と組織づくり ・ 研究テーマ及び研究計画について
第2回	5月23日	・ 本年度の研究について                      ・ 春季教研還流報告
第3回	6月13日	・ 学習会「新学習指導要領 音楽のポイントと授業づくり」 講師：押原中 薬袋 貴 教頭先生
第4回	8月6日	・ 研修会「歌の力を引き出す 合唱指導のヒント」 講師：合唱指揮者・ピアニスト 依田 浩先生
第5回	8月29日	・ 授業研究「旋律が追いかけるように重なり合う面白さを味わおう」 授業者：甲州市立塩山中学校 古屋雄人先生
第6回	9月19日	・ 今年度の研究の経過と今後の見通しについて ・ 小学校の先生方 実践報告

#### ～授業実践より～

子どもたちが自ら気づき発見したことをもとに、学んだことや学んできたことを手がかりとして試行錯誤しながら探求し、他者との協働によって考えを深め、生き生きと主体的に学習していけるような授業づくりが求められている。音楽科においても、指導者の一方的な教え込みではなく、子どもたちが主体的に活動する中で音楽的感性を十分に働かせ、音楽の世界を広めていけるような授業をしていく必要がある。

今回の授業は、鑑賞領域でありながら「聴く」という、ある意味受け身になりがちな活動だけに留まらず、フーガの手法で作られた自主教材の合唱曲を歌ってみるという活動を通して、音の重なりや音楽の広がりや音楽の広がりや主体的に味わおうとする実践である。

子どもたちは「フーガとは何か」について、学んだことを活かしながら自分の言葉で表現し、実際に歌唱することで声部の重なりや発展を身体全体で味わっていた。まさに、今求められる「主体的な鑑賞活動」が題材の中に練り込まれていたと言える。

研究会では、1年時からの学習の積み上げとともに自主教材がとても効果的だったこと、「聴く」「見る」「歌う」「話す」といった学習形態の工夫が見られたこと、楽曲を視覚的に理解するためのICTの活用など、授業に活かしていきたい視点を学ぶことができた。

同時に、「個」の能力に頼らない授業にするための子どもの実態の見取りと、それに応じた手立て、また言語活動のあり方についても話し合わせ、多くのことを学ぶ機会となった。

これからも小中の連携をもとに9年間を見据え、子どもたちが仲間とともに音楽の世界を広げていけるような実りある研究をしていきたい。

(文責：平井)

## 第2学年音楽科学習指導案

甲州市立塩山中学校

指導者 古屋 雄人

1. 指導内容 B鑑賞ア , [共通事項] ア (音色・テクスチャ・形式・構成) イ (調・動機)

2. 題材名 旋律が追いかけるように重なり合っていくおもしろさを味わおう

3. 題材設定の理由

本題材は、学習指導要領「第2学年及び3学年B鑑賞(1)ア 音楽を形づくっている要素や構造と曲想とのかかわりを理解して聴き、根拠を持って批評するなどして、音楽の美しさを味わうこと。」に関する内容であり、フーガの形式を理解し、また音楽を形づくっている要素を知覚する中で、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じていく授業を展開する。2年生はこれまでに、1年時には、ヴィヴァルディ作曲「四季」より春の第一楽章、シューベルトの「魔王」などの標題音楽について、音楽を形づくっている要素や構造と曲想のかかわりを感じ取って聴く活動を行ってきた。また2年生になり、1学期にはベートーヴェンの交響曲第5番を鑑賞する中で、要素や構造とのかかわりを感じ取るだけでなく、理解して聴く活動を行ってきた。つまり1年時には、標題音楽の鑑賞として、詩などをもとにイメージして感じ取ってきたものを、2年時になり絶対音楽を鑑賞し、動機や形式を知覚した上で、音楽のよさや美しさを味わう活動を行っているということになる。しかし、詩や絵画など音楽外のものから想像を膨らまし、音楽を形づくっている要素と曲想との関わりを感じ取ることに比べ、動機や形式などと曲想のかかわりを理解して味わうことは、生徒たちもこれまでにあまり経験のないことで、また難易度も急に上がっているように感じられる。

そこで今回は、まず1つめの聴取の自主教材として「カエルのカノン」を用い、主題に着目しその重なり方や、生み出す働きや雰囲気について、関心を持って主体的に聴く態度を育て、次に2つめの聴取の自主教材として「カラスのフーガ」を用い、「フーガト短調」と2つのフーガの共通点を探る中で、ただくり返されるだけでなく多声的に発展していくことに関して主体的に聴取し、フーガの形式について理解させたい。さらに、歌唱の自主教材で実際に声に出してフーガを歌うことで、フーガが生み出す音の重なりやの美しさや、転調を繰り返し和声的に発展することで生み出される音楽の広がりなど、フーガの特質や雰囲気を感じさせていきたいと考えている。本題材の学習を通して、標題音楽だけでなく絶対音楽であっても、その音楽に内在する多くの音楽を形づくっている要素を知覚し、その構造と曲想とのかかわりを理解した上で聴き、音楽のよさや美しさを味わう楽しさを実感させたい。

4. 教材について

(1) 教材

鑑賞教材

・フーガト短調 J. S. Bach

歌唱教材

・アカペラ「大空に向かって」(自主教材)

聴取教材

・カラスのフーガ(自主教材)

・カエルのカノン(自主教材)

(2) 教材選択の理由

「フーガト短調」は、小規模ながら荘厳な雰囲気を持つJ. S. バッハの代表的な名曲の一つである。特徴的な主題は耳馴染みがあり、中学生でも一度聴いたら覚えられる簡潔な主題になっている。また、主題が展開されていく様子もわかりやすく、さらにパイプオルガンの音色が、フーガの

旋律の重なりが生み出す響きの美しさをより一層感じさせてくれる。まさに、形式を知覚した上で、それらが生み出す特質や雰囲気を感じ取るのに適した作品である。

そして、本題材では、このフーガを最終的に鑑賞していくわけだが、絶対音楽であるフーガの鑑賞ということで、詩や絵画など、音楽外のイメージと要素を結びつけながら感じ取るわけではなく、形式に着目した上で、生み出される特質や曲想との関わりを主体的に感受させていきたい。そのために、フーガの形式について教師側から提示するのではなく、生徒自身が知覚していく必要があると考える。「カエルのカノン」については、関心を持って主題に着目して音楽を聴くために用い、「カラスのフーガ」については、「フーガ短調」と比較聴取を行い、フーガの形式について主体的に考えさせるために用いる。また、歌唱の自主教材「大空に向かって」に関しては、形式を知覚するだけでなく、最終的にそのよさや美しさを味わい、フーガの生み出す働きや雰囲気を感じさせるために用い、生徒自身が、フーガの魅力に気づき、意欲的に鑑賞ができるようにしていきたい。

## 5. 題材の目標

- ・パイプオルガンの音色，多声的な音楽，フーガの形式と曲想とのかかわりに関心を持ち，鑑賞する学習に主体的に取り組むことができる。
- ・多声的な音楽，フーガの形式を知覚し，それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じ取ることができる。
- ・音楽を形づくっている要素や構造と曲想とのかかわりを理解して，解釈したり価値を考えたりし，根拠をもって批評するなどして，音楽のよさや美しさを味わって聴くことができる。

## 6. 題材の評価基準

音楽への関心・意欲・態度	鑑賞の能力
①多声的な音楽，フーガの形式と曲想とのかかわりに関心を持ち，鑑賞する学習に主体的に取り組もうとしている。 【観察・ワークシート】	①多声的な音楽，フーガの形式を知覚し，それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じ取っている。【観察・ワークシート】 ②音楽を形づくっている要素や構造と曲想とのかかわりを理解して，解釈したり価値を考えたりし，根拠をもって批評するなどして，音楽のよさや美しさを味わって聴いている。 【鑑賞・ワークシート】

## 7. 指導計画と評価計画（全3時間）

ねらい	時	学習活動	評価基準	☆Aと判断する 生徒の状況例 ■個別な働きかけを 要する生徒への支援	備考
多声的な音楽の主題や、その重なり方について知覚する。	1時間目	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「大空に向かって」の音取りをする。</li> <li>・「フーガ短調」を聴き、その曲の第一印象についてまとめる。</li> <li>・「カエルのカノン」から、主題の重なり方について聴取し、意見交換する。</li> </ul>	関① 多声的な音楽，フーガの形式と曲想とのかかわりに関心を持ち，鑑賞する学習に主体的に取り組もうとしている。	<ul style="list-style-type: none"> <li>☆多声的な音楽の主題やその重なり方について主体的に聴取し，自分の言葉で説明したり，仲間と意見交換したりできている。</li> <li>■多声的な音楽の主題やその重なり方について聴取できない生徒には，仲間の意見を聞かせたり，教師と一緒に確認させる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習形態 一斉</li> <li>・学習形態 トリオ (ペア) 学習</li> </ul>

<p>フーガの形式について理解し、形式が生み出す特質や雰囲気を感じ受する。</p>	<p>2時間目 本時</p>	<p>・「大空に向かって」の音取りをする。</p> <p>・「カラスのフーガ」と「フーガト短調」を比較聴取し、フーガの形式について考える。</p> <p>・「大空に向かって」を歌い、フーガが生み出す特質や雰囲気を感じ受する。</p>	<p>鑑① 多声的な音楽、フーガの形式を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じ受している。</p>	<p>☆フーガの形式を理解し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気について感受できている。</p> <p>■フーガの形式について理解できない生徒には、教師と一緒に確認させる。また、特質や雰囲気を感じ受できない生徒には、何度も歌う中でその特質について説明をする。</p>	<p>・学習形態 一斉</p> <p>・学習形態 トリオ (ペア)学習</p> <p>・学習形態 一斉</p>
<p>パイプオルガンの音色、フーガの形式など、音楽を形づくっている要素や構造と曲想とのかかわりを理解して、そのよさや美しさを味わって聴く。</p>	<p>3時間目</p>	<p>・「大空に向かって」を歌い、フーガが生み出す特質や雰囲気を感じ受する。</p> <p>・パイプオルガンについて、その発音原理を学び音色の特質を考える。</p> <p>・フーガト短調を聴き、批評する。</p>	<p>鑑② 音楽を形づくっている要素や構造と曲想とのかかわりを理解して、解釈したり価値を考えたりし、根拠をもって批評するなどして、音楽のよさや美しさを味わって聴いている。</p>	<p>☆音楽を形づくっている要素や構造と曲想とのかかわりを理解して、そのよさや美しさを味わって聴くことができている。</p> <p>■音楽を形づくっている要素や構造と曲想とのかかわりを理解できない生徒、またそのよさや美しさを味わって聴くことができない生徒には、歌う中でその雰囲気を感じ取らせる。</p>	<p>・学習形態 一斉</p> <p>・学習形態 トリオ (ペア)学習</p>

8. 本時の授業について

(1) 日時 平成30年8月29日(水)

(2) 場所 甲州市立塩山中学校 第1音楽室

(3) 本時の目標 「フーガの形式について理解し、形式が生み出す特質や雰囲気を感じ受できる。」

(4) 展開

過程	学習のねらいと学習活動	教師の指導・支援	評価・備考
<p>導入 (10分)</p>	<p>1. 「大空に向かって」の音取りをパートで行う。また、フーガト短調やカノンについて前時を振り返る。</p> <p>・前時の学習を確認し、フーガト短調の特徴や、カノンの特徴について意見をまとめる。</p>	<p>・あえて音取りに留め、曲の形式などについては一切触れない。</p> <p>・主題がくり返されていたという特徴についてまとめる。</p>	<p>・学習形態 一斉</p>

<p>展開 (35分)</p>	<p>2. 「カラスのフーガ」と「フーガト短調」を比較聴取し、フーガの形式について考える。</p>		<p>・学習形態 トリオ (ペア) 学習</p>
<p>2つの「フーガ」の共通点から、 「フーガ」とはどのような形式なのか考えよう！</p>		<p>・過去に行った比較聴取の例をだし、円滑に聴取活動が進むよう支援する。</p> <p>・「カラスのフーガ」を弾く時にあえてゆっくり弾いたり、主題を強調して弾く。</p> <p>・ICTを用いたり、楽譜を用意する中で、視覚的に特徴を捉えさせる。</p>	<p>鑑① 多声的な音楽、フーガの形式を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じ取っている。</p>
	<p>・「カラスのフーガ」と「フーガト短調」を聴き比べ、共通する特徴について意見交換する。</p> <p>3. 「大空に向かって」を歌い、フーガが生み出す特質や雰囲気を感じ取る。</p>		
<p>「フーガ」を歌い、雰囲気や響きの美しさを感じ取ろう！</p>		<p>・なぜ「大空に向かって」が、フーガだと言えるのか、生徒から意見を出させる。</p> <p>・それぞれのパートを聞かせたり、合わせて歌ったり、声部を抜いたり、様々なパターンで歌う中で、4声のフーガが生み出す特質や雰囲気について感受させる。</p> <p>・フーガの形式が生み出す特質や雰囲気について、感受したことをまとめる。</p>	<p>・学習形態 一斉</p>
<p>まとめ (5分)</p>	<p>4. 活動の振り返りと、 次回の内容の確認。</p> <p>・振り返りを記入する。 ・今日の授業について感じたことなどを意見交換する。</p>	<p>・次回は、パイプオルガンについても学習し、最終的にフーガト短調を各自批評することを伝える。</p>	<p>・学習形態 一斉</p>

## 生徒のワークシートから

### 1. フーガを歌い、その響きの雰囲気について感じたこと（2時間目）

- ・主題が高くなったり、低くなったりすることで、それぞれの声部の音がカノンよりはっきり聞こえた。
- ・途中まで歌う旋律がバラバラだから、一つになったときによりきれいな響きが生まれた気がした。
- ・一つの声部だけだと響かないが、フーガみたいにするとうちの部屋の中で響き渡るような雰囲気を出しているようだった。
- ・4つの声部が順々に重なっていくことによって、曲が進んでいき、最後に重なることによって一体感が出る。
- ・カノンは同じ音程の歌をずらして歌ったからハーモニーがわからなかったけど、フーガはわかりやすかった。
- ・フーガはカノンに比べて、音が重なって響いている感じだけど、カノンはまとまりのある響き方だった。
- ・他のパートを意識して聞くと、違う音、違うリズムで歌っているのにきれいにハモっていて、違うリズムだけど主題が入れ替わっていて聞こえるから1つに聞こえてきれい。 ・包み込まれる感じ。
- ・フーガは違う音が入ることで、どこかで重なってきれいなハーモニーになる。 ・響きが広がる。
- ・一つの声部で歌うより、四つの声部で歌う方が響いていて重みがあった。 ・柔らかく温かい感じ。
- ・音が全パート同じカノンよりも、音の厚みがある感じがする。 ・1声部の時より曲が盛り上がる。
- ・音の高さの違う声部が重なると音に厚みがある豊かな感じ。 ・終わりが四部でしっかり重なって終わっていた。
- ・フーガの方がカノンよりも、より曲が盛り上がる感じがする。

### 2. これまでの学習を踏まえ、「フーガ短調」の紹介文を書いてみよう（3時間目）

- ・フーガ短調は、「音楽の父」とも呼ばれる J.S. バッハが作曲した曲で、パイプオルガンという楽器を使って演奏されている曲である。パイプオルガンは、たくさんのパイプから音が出るので、音の高低の幅が広い。それを利用して、最初は高い声部から主題を奏でていき、低い声部も主題を繰り返して、それが重なり合っていく。バラバラだった声部が1つに重なったときの響きが魅力的である。
- ・フーガ短調は、主題が次々に加わってくる。主題とは別の音のものが重なることで、きれいなハーモニーを作り出している。「先がこんな風かな」と予想できる歌もあるけど、私はこの歌の先が予想できなくて、「次はどんなのが入るだろう」と、ワクワクしたりドキドキする。そんな興味が出た。フーガ短調のきまりを理解するともっとおもしろい。
- ・主題がくり返され、高くなったり、低くなったりして、響きがすごく良い。1パートだけだと、ものたりない感じで、色々重なってくるとにぎやかで力強い感じになる。明るくなったり暗くなったり転調する。
- ・始めの主題が次々に加わる声部によって繰り返されながら発展していく形式です。次々と加わることにより、カノンよりも響きが広がるようなきれいな重なりとなります。また、始めに示された主題だけ歌うときよりも、他の声部が入ることにより、迫力がある響きとなります。
- ・始めの旋律に音加わって、たくさんの旋律が重なります。主題が主になるときは、それ以外の音が静かに流れ低音になったりする。高い音で旋律を弾いているときは、違う旋律で低い音が流れ、高音でもなく低音でもなくきれいに混ざり合っている。安定している。パイプオルガンは、1音1音長く響き、音が重なりよい響きだった。
- ・始めに主題が示されて、それから加わる声部によって何度もくり返されながら進んでいく。パイプオルガンによって音が混ざり合っていくので、展開がどんどん変わっていく。また、音が転調していくので、曲の雰囲気が変化し、音の明るさや暗さが変化する。主題に声部が加わるのでどんどん曲が発展していく。
- ・違う声部たちが転調やリズムが変わったりして重なることでイメージの移り変わりがおもしろく、暗くなり明るくなり、伸ばしたり、激しくなったりすることで、カノンとは違った味が出てきて、それにパイプオルガンの様々な音を出し合うことで曲がさらに豊かに聞こえる。この曲は色々な顔があるおもしろい曲です。

- ・フーガト短調は、主題の音が高くなったり低くなったり、明るくなったり暗くなったりそれがずっとくり返されながらできている曲。そのため音が重なったときに、非常に美しいハーモニーとなって聞こえてくる。
- ・パイプオルガンというたくさんのパイプからできている楽器が使われています。ピアノのような音で特徴が似ています。フーガト短調とは、主題にいろいろな音程が加わっていきます。そして、くり返されていき、響きがどんどん増えていきます。最初と最後での響きの違いや明るさなどの違いを感じられるのがおもしろいです。どんどん旋律が重なっていきとてもきれいです。

## 《授業後の研究会より》

### 授業者反省

本題材では、音楽を形づくっている要素や構造と曲想とのかかわりを理解して、解釈したり価値を考えたりし、根拠をもって批評するなどして、音楽のよさや美しさを味わって聴くことを主眼とし、フーガという形式を知覚した上で理解し、さらに形式が生み出す特質や雰囲気を感じ取れることを念頭に授業を展開した。これまで、本題材を取り扱う際、どうしても知覚することに偏り、味わう部分に関して希薄になってしまう傾向にあった。今回は、知覚した上でそれらの特質を味わえるよう自主教材を用い授業を進め、一定の効果を感じることができた。しかし、1時間目のカノンを取り上げた授業で、旋律の重なり方に着目させたときに、多くの例を提示した結果、関心は持てるようになったものの、フーガを知覚する妨げになってしまった部分があるので、旋律の重なり方としてカノンを取り扱う際、もっとシンプルかつ効果的に取り上げるべきだったと考えている。また、自らの考えをもとに知覚するというのに時間をかけ過ぎてしまい、歌って感じたことの意見を共有する時間があまり取れなかったことも反省点としてあげられる。次時の授業でもう一度フーガやカノンを歌い比べる中で、フーガの持つ特質や雰囲気を感じさせた上で、授業をまとめていきたい。

### 成果

- 主体的な学びを促す工夫について
  - ・生徒なりの言葉で考えて書いていた。
  - ・良く聴いて自分たちの言葉で説明しようとしていた。
  - ・生徒が自ら学ぼうという姿勢が見られた。
  - ・「フーガってこうだよ！」と一方的に教えるのではなく、何度も聴いたり、グループの力を借りて答えをみつけていた。
- 効果的な自主教材の工夫について
  - ・自主教材を作ることにより、学習すべき事項が明確になり生徒にも理解できた。
  - ・ねらいを持って自主教材を作っているのが、確かな方向性が見える。
  - ・フーガの自主教材が、わかりやすくおもしろいものだった。
  - ・自主教材は有効で魅力。意図を効果的に示すことができる。
- 効果的なICTの活用について
  - ・視覚化は、声部を感じ取るのにとってもわかりやすかったと思う。
  - ・楽譜をスクリーン上に提示し、曲の進行もわかるようにすることで、音を視覚的に捉えられ気づきが広がる生徒もいた。
  - ・楽譜を目で追いながら考えられたことが良かった。
- 鑑賞領域における歌唱教材の活用について
  - ・4声で歌い合わせることで、フーガについて自分なりに考えたこと、感じたこと、まとめたことを、音を通して確認できていた。

- ・歌唱教材を用いることで、フーガを実際に表現することができたのが良かった。
- ・理論を実際に歌うことで生徒に体感させてあげることができるという点が良かった。

#### ○その他

- ・短い部分を何度も聴かせてヒントを与えながら深めていって良かった。
- ・音楽的な言葉を使って書けている生徒が多かった。
- ・生徒の最後の感想など、音楽的な用語が使われていて自分たちのものになっている。
- ・聴く→見る→書く（考える）→話し合う（深める）→歌う のように活動が多様だった。

#### 課題

- ・オルガン用の3段譜用いていたが、楽譜の段の数＝声部の数だと思込んでしまう生徒がいたので、2段もしくは、4段の楽譜を用いても良いのではないかな。
- ・転調の理解について、転調や多声的に発展していくということの理解が難しい。
- ・カノンとフーガを比較して、違いを考えるのが難しかったようだった。
- ・カノンとフーガの違いをもう少し明らかにしても良いのではないかな。
- ・特徴を感じ取らせる聴取教材はシンプルにする。
- ・板書に考えをまとめ、今日の授業が残ると良い。
- ・今日のテーマとキーワードは消えてしまわないように黒板に書いておいた方がよい。
- ・「フーガとは？」のグループのまとめがさらっと終わってしまったので、伝え合う中で学ぶという点で他のグループから学んだり気付いたりする時間をもう少し取っても良かった。

#### 《考察 ～今後の授業に向けて～ 》

今回の授業で、関心や意欲を高めるためにカノンの聴取教材を、形式を知覚し理解するためにフーガの聴取教材を、形式の生み出す特質を感受するためにフーガの歌唱教材を用意した。カノンの自主教材で反行カノンや逆行カノンを使用したことで、意欲的に楽譜から主題を探したり、重なり方を考えたりすることができたが、課題にもあった通り、フーガの形式を捉えさせる点で、生徒を混乱させる原因にもなってしまった。それぞれねらいがあって用意した自主教材だったが、3時間の授業の流れの中で、生徒の思考を妨げてしまったことについては、授業をやってみてわかったことなので、今後の授業に生かし、本題材では、1時間目のアプローチの仕方を変え、シンプルに主題がくり返される普通のカノンに対して、フーガの音の重なり方がどう違っているのか考え、またその違いから感じられる特質を捉えさせるような展開をしていきたい。2つめのフーガの聴取教材については、比較聴取し共通点からフーガの形式を捉えさせるというアプローチに関しては、生徒の意見から見てもフーガの形式を知覚する手助けになっていた。しかし、当然全員が完璧に知覚できたわけではなく、グループで知覚したことを共有する際にも、時間がかかってしまった。全体の展開の中で、ここでグループ活動を行わず一斉指導で意見を出させ形式を捉え、その後の味わう場面で、もっと意見を共有したり、批評し合うことで、授業全体がさらに主体的で活発なものになったかもしれない。そして、今回、形式を知覚・感受する授業に歌唱教材を用いたわけだが、今までのフーガの授業は、どちらかという聴取し知覚したものを感想に書き、そこから感受にあまり発展し切れなかったのに対し、最終的に、「音の広がり」や、「響きの厚み」など、感じ取り味わうことができる生徒が多くいたので、一定の効果のある歌唱教材になり成果が感じられた。表現領域に聴取教材があるように、今後も鑑賞領域に表現活動を交えながら、より生徒の理解が深まり、音楽のよさや美しさを味わえるようにしていきたい。また、自主教材に関しても、さまざまな題材の授業に渡って用いることができるような、効率よく効果的なものを考え、生徒が主体的に学び、深い学びへとつながっていく授業が展開できるように努めていきたい。